平成19年3月31日発行
通巻第37号
2007

親子読書研究誌

さざなみ

第37号

鹿児島県立図書館

刊行のことば

鹿児島県立図書館長　上今　常雄

本誌「さざなみ」は、親と子の読書感想文を内容とする県立図書館児童室文集として昭和四十五年三月に創刊されました。その前書きには、『親と子の読書は、親子の心にそれぞれささやかな石を投ずることだと考えていいでしょう。そのささやかな石が波紋となって親子の心を洗ってくれることになりましょう。』とあり、まさに親子読書の真髄をあらわしていることばです。

その後、第七号からは現在の親子読書研究誌「さざなみ」として、親子読書に関わるみなさんのために参考となる研修会の情報、親子読書会や学校の読書活動の紹介などをまとめ、県内の公共図書館、学校等に配布し活用していただいてきました。

本県の読書運動は、県立図書館長であった久保田彦穂（椋鳩十）先生が、昭和三十五年から広く県下に提唱した「親子二十分間読書」に始まり、読書活動を「心の教育」としてとらえ、今日まで継続、充実してまいりました。平成十八年度、県内には約五百の親子読書会が結成され、活動の広がり・定着が感じられます。子どもの読書離れが言われて久しい今日、本県小学生の読書量は『一か月平均十五・四冊』と全国平均の九・七冊を大きく上回り、これまでの活動の成果を実感するところです。

本号からは、これまでのような冊子形式でなく県立図書館ホームページへの掲載の形になります。今まで以上に多くの方々に見ていただき、子どもたちの読書活動を進める上で参考にしていただけると幸いです。

読書は子どもたちの心に感動を与えてくれます。これからも、家庭、学校、地域で親子読書活動の継続と一層の充実を図り、子どもたちの心の扉をたたいていきたいものです。

目次

刊行のことば……鹿児島県立図書館長　上今常雄
平成十八年度親子読書研修会
講演ダイジェスト「子どもといっしょに感動しよう」……常葉学園大学非常勤講師　村上淳子……1
事例発表Ⅰ……いちき串木野市おはなしおばさん「バンビの会」……16
事例発表Ⅱ……蒲生町親子読書読み聞かせの会……18
広げよう　深めよう　「読み聞かせ」指導者研修会……20
読書活動の充実について～影絵を通して～……薩摩川内市立育英小学校親子読書会「おはなしランド」　梯美恵子……21
子どもたちの瞳に支えられて……鹿児島市立中洲小学校仲よし読書「せんだんの木の会」　塩津麻由美……22
ほるとの森の活動及び、図書館との連携……霧島市国分「ほるとの森」田間美沙緒……23
よみきかせたいの活動について……鹿児島市立谷山小学校応援団　皮籠石章……24
読み聞かせ活動の広がり……霧島市福山町「ふくの子おはなし会」　越智ひとみ……25
「毎月二十三日は子どもといっしょに読書の日」事業説明・取組事例……26
子ども読書推進のための我が校の実践
特色ある読書活動Ⅰ……出水市立下水流小学校……28
特色ある読書活動Ⅱ……指宿市立柳田小学校……30
緑陰読書Ⅰ……頴娃町立九玉小学校……32
緑陰読書Ⅱ……肝付町立内之浦中学校……33
平成十八年度「朝読み・夕読み」実践活動状況……34
平成十八年度　夏季休業中の緑陰読書実施状況……36
平成十八年度　夏季休業中の学校図書館開館状況……37
平成十八年度　親子読書会結成状況及び所属会員数……38
平成十八年度　県内親子読書会一覧……39

平成十八年度親子読書研修会　講演

子どもといっしょに感動しよう

常葉学園大学非常勤講師　村上淳子

こちらの図書館からお誘いをいただいたとき、本当にうれしいと思いました。と、申しますのは、わたくしがずうっと読み聞かせ読書指導をやっていますのも、鹿児島県立図書館の椋鳩十先生の読書運動に啓発されまして、それで続けてきたという面もあるわけです。

私は、今、紹介されましたとおり教員でした。自分が本が好きだったから、子どもたちにも本を読んできたんですけど、時にはもうこの辺で終わりにしようかなんて思うときもなかったわけではないんですけれど、椋鳩十先生のお書きになったものを読んだり、あるいは、子どもたちの実態を見たりしながらずっとずっと続けてこられたわけなんです。それは、椋鳩十先生の書かれたものや運動が私の心の支えとなっていたからなんです。その図書館からお声がかかったということで、大変喜んで参りました。あいにく、こんなお天気になってしまいましたが、皆さんが「ああ、今日来てよかったわ。」っていうようなお話になればいいなあと思います。

子どもたちのことを考えてみようと思っていましたら、とんでもない事件が起きましたよね。ああいうことが起こるたびに、私は本当に何でなんだろう、何でなんだろうとずっと思ってきました。私が学級担任をしているころは、ああいった事件はまだありませんでした。管理職になったころああいった子どもたちの事件が起きてきたんです。やっぱり心の教育というのは大事だなということをつくづく感じました。

今、子どもたちは変わってきているんだということをみんなは言うんですけど、私は本質的なところは変わっていないと思うんです。皆さんのように子どもたちに本を通して心を通じ合っている人たちがいっぱいいれば、子どもたちの心は落ち着いてくるんですね。ですから、皆さんがなさっていらっしゃることは非常に大事なことだと思います。やっぱり子どもっていうものは、学校と家庭と地域がお互いに手を取り合って、育てていかなければいけないと思うのです。やれ学校が悪い、やれ家庭が悪い、やれ地域が悪い、お互いに相手のせいにするのではなく、手を取り合って、子どもをみんなで育てていくそういう意識が大事。そういう中で皆さんのような方々が、活動していただけるということは非常に嬉しいことだと思うのです。子どもたちの今の様子、いろいろな現れはありますけども、私は変わっていないということを信じています。

私が長い間、本を読んできた、子どもたちに読み聞かせをしてきたのは、ま、簡単に言えば私は、自分が本が好きだったからと言えばそれだけなんです。だから長く続けてこられたわけなんですけども、この本が好きだということが一番根底にあって、大事なことだと思うんです。私はもともと中学校の国語の教師でしたから、中学生に読んできたんですけども、その中学生に読んできている中で、だんだん子どもたちの聞く様子が変わってきてしまったんです。私が一番に読み出したのは、教科書に出てきた作家の短編です。そこから始まって子どもたちに読み聞かせをしていました。こんなこと言うと、かっこいいんですけども、本当は授業がへたくそで、子どもたちがあくびをする。そうすると「あなたたち国語の授業面白くないの？じゃあ、授業なんてやめてしまいましょ

う。」といって私が本を読み出すと、幸か不幸か、子どもたちの目が生き生きとしてくるんですよね。それで「わあ、楽しい」と思って、自分がどんどんその中にのめり込んでいったわけなんです。子どもたちの目が生き生きとしていたのが、あるときからちょっとこれ変じゃないのかなと思い始めたわけなんです。それがなんだろうかなと思って、いろいろ考えてみたところが、どうも子どもたちの聞く力が落ちてきているんだなということにふと思い当たったんです。皆さんの中には、読み聞かせをなさっている方が大勢いらっしゃると思うんですけど、そういうことをきっとお思いになっていらっしゃる、感じていらっしゃると思います。私は、二十五、六年前から子どもたちの聞く力がうんと落ちてきているなと感じたんです。言語というのは、『読む・聞く・話す・書く』四つの領域がありますね。その四つの領域の中で、私は「聞く」ということは非常に大事なことだと思うんです。何も言葉のわからない赤ちゃんに、お母さんが語りかけてくれる。そこからいろんなものを聞いてわかってくるわけなんですよね。何にもわからない赤ちゃんに、お母さんがいろんなことを語りかけながら子育てをしていると思うんです。「ほら、おなかすいた？おっぱいあげるね」なんて言いながら・・・。そういうお母さんたちの語りかけというのがすごく大事。それがもとになって、読み聞かせにもつながってくるわけですね。言葉というのが分かって、いきなり本を見せてね、赤ちゃんに読み聞かせようなんて、わかりゃしないわけで・・・。そういう語り聞かせ、あるいは語りかけというものがあって、子どもが言葉というものを知り、物事の概念が分かり、いろいろなことが話せるようになってくるわけで。聞く力というのがすごく大事だと思うんです。すべてのなかの基本だと言ってもいいくらいですね。その聞く力が劣ってきているなということを感じたんです。

劣ってきているなっていうのは、今までこんなに力があったのがこんだけになっちゃったということじゃなくて、かつての子どもたちに比べて、今の子どもたちが聞く力が育っていないな、こういう方が正しいかもしれません。それは、何なんだろうなぁって思ったらば、私がいろんなものを読んでも、子どもたちの感動が浅くなってきたような気がしてしようがないんです。これが私が気が付いた最初のことなんです。こういう言い方っていうのは難しいと思いますが、この本を読んでこんだけ感動する子どもたちがいたとする。それが何年もやっていたら、その本を読んだときの子どもたちの感動の様子がこのくらいしか感じられないっていうふうに、そういうことを私は感じたんです。それで、原因はなんだろうと考えた結果、聞く力が落ちてきているんだなっていうことに気がついたんです。その聞く力が落ちてきたことにつながることが何だろうかなと、私なりに考えたことが、やっぱりテレビの影響かなと思いました。私が教員になったのは、昭和三十五年です。そのころは、そんなにテレビが普及していませんでしたから、隣の家にテレビを見せてもらいにいって、隣の家でテレビを切れば「はい、おしまい」っていう状況だったのが、だんだんテレビが普及してきて、一家に一台あるようになり、チャンネル争いが起こったかと思ったら、あとは一家に、二台三台となって、自分の好きなものをたっぷり見られるようになってきたんですね。テレビは、映像が映って言葉が入ってきて分かったつもりになる。ここんところが私怖いなあと思うんです。分かったつもり。これが聞く力を育てていかない一つの原因じゃないかと思うんです。

それから、子育てで語りかけることが・・・って言ったんですけど、お母さんたちがテレビに子どもたちのおもりをさせて、急いで洗濯物を干しちゃおうとか、掃除やっちゃおうとか、お茶碗洗っちゃおうとか、テレビを見せっ放しにして

いる、そういうことも、子どもたちの聞く力を育てない、阻害している一因じゃないかなと思うようになってきたんですね。だからこそ、だからこそ、本を読み聞かせること、語り聞かせることが本当に大事だと思うんですね。そういう子どもたちの現れがあるんです。

さて、子どもたちの読書量、これも減っているんです。みなさんご存じだろうと思いますけれど、毎年、毎日新聞社と全国学校図書館協議会とで読書調査というものやっています。これは六月にやって、十月の読書週間のときにその集計結果が出ます。それによりますと、「あなたは先月一か月間、何冊本を読みましたか」という質問が毎年あるんですね。それが、何冊って答えるんですけども、読んだ本の冊数の平均値というのは、私はあまり大事な問題でないと思います。それでも小学生は七、七冊、中学生は二、六冊で、高校生が一、六冊ぐらいです。これもだいぶ良くなってきたんですよ。前はもっとひどかったんです。だいぶ良くなってきたんですけれど、平均読書冊数よりも、不読児不読者というのが問題なんです。不読児というのは、一か月で一冊も本を読まない、ゼロという子です。小学生を不読児、中学生、高校生は不読者という言い方をします。これが非常に多いですね。どのくらいいるかというと、小学生これは少なくて五、九％。小学生というのは結構読んでいるんです。中学生が二十四、五％高校生になると五十、七％です。ひところ高校生は六十九、八％でした。百人いたら、七十人の生徒が一冊も本を読んでないというそういう現れがあったんですね。これは何とかしなくっちゃということで、子ども読書年が始まったりなんかしたわけなんですけれど。というように、子どもたちが本を読まなくなってきている、これも大きな問題だと思います。

国は何とかしなくっちゃというので、子ども読書年を制定したり、あるいは子どもの読書活動の推進に関する法律をつくったり、皆さんご存じかと思いますが、四月二十三日が子ども読書の日ですよね。一番最初にこれが決まったときに私は、期待して新聞を開けました。「どこかでこんな実践してますよ」なんていうのが載っているんじゃないかと思って期待して新聞を開けました。朝日新聞にたった一行、四月二十三日は子ども読書の日ですよというのが載っていただけでした。要するに、みんな知らなかったわけです。学校の先生も知らない。これじゃ困るということで、文部省がポスターを作って学校に配って、「四月二十三日は、子ども読書の日ですよ。そこから子ども読書週間が始まるんですよ。何か学校で取り組みをしてください。」っていうようなことをいったんです。少しずつ少しずつ学校でその取り組みをしてくれているわけなんですけれども、それでも子どもたちの読書量が増えないということで、今度は、去年の十月二十七日、「文字活字文化振興法」という法律ができました。この「文字活字文化振興法」のときには、新聞社も大きく取り上げました。何とかみんな文字活字に親しんでもらおうというそういう取り組みをしたんです。ちょうどその一回目の時に、文化庁がシンポジウムをやるっていう。それで私も呼ばれて、パネリストで言いたいことをうんと言おうと思って行ったんですけれども。四人パネリストがいたんですね。あいうえお順に発言なんですね。「む」ですよ。村上ですから「む」ですよ。一番最後なんです。私の番になったときにはしゃべる時間なんてありゃしない。「これは私、不満です。もっと喋らして下さい。」と時間をオーバーしてしゃべらしてもらえましたけれど。十月二十七日が、文字活字文化の日なんです。みなさんこれを覚えておいてくださいね。この日にはいろいろなところでいろいろなイベントをやるわけなんですけれど。イベントだけやったからって、みんなが本を読むようになるとは限らないわけです。みなさんのように、地道にこつこつと、

やっていることが大事なんですね。でも、国でもそういうことに取り組んでいるということ、それは非常に大事なことだと思います。

じゃ何でこんなに、読書読書、っていうのだろうかって考えたときに、やっぱり私は子どもたちに栄養のある食事をきちんと食べさせて体が育ってくる。それと同じように、心に栄養を与えて心を豊かに育てていく。これが大事なことであって、その一つが、私は読書だろうと思うんです。読書の中でも一番最初は読み聞かせから入っていって欲しいなと思っています。読み聞かせということに関しては、いろんなご意見があります。「聞かせる。相手が聞きたくないのに聞かせる。これは一方的じゃないかと思う。」っていう方もいます。だからそういう人たちは、読み合いとか読み語りとか色々な言葉を遣いますけども。読み合いや読み語りというのはピンとこない。さっきの子どもたちが本を読まないという実態があったら、もういいじゃないの。無理に聞きなさいというのでもなんでもいいじゃないの。読み聞かせっていうのがやっぱり一番いい言葉じゃないのと私は思って、開き直って読み聞かせという言葉をつかっています。ただ聞かせるのも、「門構えに耳」が入っている"聞く"これじゃしっかりきけません。これではなくて、目と心と耳を合わせて"聴く"こっちにしたいと思うわけです。だから、私はあえて読み聞かせというときにひらがなを使っています。こちらの方が集中するわけですよね。そういう聴く力を育ててみたいなあと思って、私は読み聞かせをわざとひらがなで「きく」をつかっています。これは私だけのこだわりかもしれないんですけれども。ずっと、多分、「よみきかせ」という言葉をつかいながら、きくをひらがなで書いていくだろうと思います。

そして、子どもたちに一生懸命読んでいるんですけどもね。嬉しいことに、読みきかせが、嫌いな子ってまずいません。でも、私の長い経験で、いました、一人。その子は、小学校の時から、本が大好きで、大好きで、ずうっと読んでいてね。六年生のときにドストエフスキーを読んだとかね、そういう子なんです。私は中学一年生が入ってきたので、おもしろいお話を読んでやることが大事だなあと思って、ちょうど椋鳩十先生が編集した「ねしょんべん物語」の「井坪先生」というふざけた話を読んだんです。井坪先生って、とてもこわい先生でね。友達がトイレに行きたくなったんです。昔の学校ですから、みんなとても緊張していたんですね。友達が授業中に手を挙げて、「先生！」「何だ！」「先生、くそ」って言ったら、「俺はくそじゃない」と延々とお説教が始まって、その子がみんなもらしてしまって・・・というそういうお話なんです。そんなのを中学生に読んでやったら子どもたちはげらげら笑ってすごく喜んで聴いていたんですが、その女の子に私は怒られました。「先生、そういうくだらない話を読むんなら、読みきかせの時間に私には自由に読書をさせてください。こんなくだらない話、聴いちゃいられません。」って。「確かにあなたの言うこともそのとおりだと思う。私の選書もまずかったと思う。でもね、みんなはこれで楽しかったんだよ。読書って楽しくなきゃだめなのよ。楽しいのから入っていかなきゃだめなのよ。一回だけ私の話を聴いてごらん。それでもいやだったら、もう聴かなくってもいい。」って言ったんです。その一回だけっていうときには、私は『ペロ出しチョンマ』を読んだんです。彼女は試しに一回聴いてくれたわけなんですけど。だんだん表情が変わっていって、身を乗り出して聴いていましたが、涙をいっぱいためて「先生、人に読んでもらうって、いいもんだね。」って言いました。わたしもうれしくなったんですけど。それからずっと読みきかせを、自信を持って、子どもとともに楽しみながら続けています。何が楽しいのかというと、読んでいる最中に子どもたち

の心が私の方に迫ってくるのが、ようく分かるんですよね。だから楽しくてたまらない。読み終わった後のあの部屋の雰囲気、ぴーんとした空気の中、「あら、この子たち、息もそうっとしているのかしら。」って思うような、そういう雰囲気。これがもう何とも言えないんですよね。それで私は、ずっとずっと読んできているわけなんです。今はね、幼稚園児から小学生、中学生、高校生まで、ボランティアで一生懸命やっているわけですけれど。楽しくてたまらない。幼稚園は年少さんへずっと読んでいる。皆さんもちびちゃんといっしょに本を読んでいるって場合があるでしょうけど、おうちで読む場合にはどうぞだっこしていっしょに本を見ながら読んでくださいね。小さい子は読んでくれている人のどこか体に触れていると安心して聴かれるんですよ。幼稚園の年少さんに行ったときに、つくづくそれを思いました。

ちびちゃんが床に座って待っていてくれるんです。一番最初なんて聴けませんよ。後ろの方でばたばたやっている子もいます。でも、わたしはそこで始めるんですね。園児のいすに、わたしが座るんです。子どもの目線のちょっと上に本がきて一番いいもんだからそれで読むんですけれど。座ると子どもたちみんな周りにくっついて来ます。そして、わたしのどこかを触っています。「ねえ、ちょっと後ろ下がって。」って言っても絶対下がりません。どっか触りながら聴いていたいからです。二十何人かの子どもたちが、後ろでばたばたやっている子もいます。「じゃあね、私が下がる。」って、私が下がるとみんなくっついてきちゃうんですよ。「そこ動いちゃだめよ。」って言ってもくっついて来ちゃうんです。そして、わたしがもういいやと読み始める。そうするとみんな怒るんです。「見えなあい」って。当たり前ですよね。くっついていたら見えないんです。「ほうら、ご覧なさい。見えないでしょ。だから動いちゃだめよ。」っていって、また、下がるんです。今度は納得してくれる。毎回毎回そんなことをやりながら、三年保育だから三歳児から四歳児の子たちに読んで聴かせる。その子たちはどんどんどんどん本の世界の楽しさを分かってくれて、真剣に聴けるようになっていくんですね。

五回目ぐらいの時かな、終わったらば、拍手をしてくれました。すごくうれしいと思いました。「ああ、子どもたち、楽しかったら拍手するってこと知っているんだな。」

それから七回目か八回目の時、今度は『さんびきのやぎのがらがらどん』を読んだんですけど、その子たちが「アンコール、アンコール」って言い出したんです。「えっ、もう一回読むの？」って言ったら「そう。」って。もう一回読んだんです。そして、いつも私は読んだ本をそこにおいて置くんです。そうすると子どもたちは後で読んでいるんですけど。なんと、なんと、子どもたちに「よみきかせごっこ」がはやっちゃったんです。私が行ってみますとね、「先生、早く来てえ。」なんて言うんですけれど。遠くから眺めていますとね、ちょっと女の子のませた子たちが「さあ、始めるよ。」っていうと前に何人かが座って本を広げて、なんだか訳の分からないこと言っているんです。周りの子どもたちは「ふん、ふん。」なんて言いながら聴いているんです。私が園長先生に「園長先生、あれあれ。おもしろそうね。」っていうと、「そうなのよ。このごろよみきかせごっこがずっとはやっていてね。この間なんか本が逆さなのよ。」なんて言ってましたけれど。そのくらい子どもたちにとって楽しくていいものだなあって思ってくれるようになっていったんですね。そういうちいちゃな時から本当は読みきかせをしていくのが理想です。赤ちゃんのころから語ってきて、だんだん本も分かるようになってきたら、最初は「ブーブー、ワンワン」の世界からだんだん読んでいってくれるのが理想なんですけれど、でもね、中学生からでも、高校生になってからでも間に合うんです。

私はよく言うんですけれど、「中学生からでも間に合う。」って。皆さんがおうちに帰って中学生の息子さんに「はいあなた、本を読むから聴いてなさい。」それで聴いているような子じゃ、ちょっと困りますよね。中高生になったらば、学校、地域に集団でお願いをする。学校でやってもらうのが一番いいだろうと思うんですけれど、決して「うちの子、高校生だからだめだ。」なんて思わないでください。それでもまだ間に合います。その例として、ここに私が書いた『本を読んで甲子園に行こう』がありますけれど。本を読んだって甲子園なんか行けません。今も私は、常葉学園橘高等学校の野球部に読みきかせに行ってるんですけれど、そこの野球部は、出ると負けぐらいに弱いチームでした。監督が替わって、監督が立派なんです。「私は、野球の技を教えるのではない。野球を通して人間を磨くんだ。」って言って、朝練なんてやめちゃって朝読書にしちゃったんです。そして、「お前ら、読め。」じゃないんです。師弟同行、ご自分も一緒に読んでいるんです。その中の一日、金曜日だけ私が読み聞かせに行くんです。一回目の時、何を読んだかというと、絵本の『ゆずちゃん』を読んだんです。どうぞ皆さん、絵本をうんと読んで欲しいなあと思うんです。絵本というのは素晴らしいです。絵本は子どもが読むものと思っている人がいっぱいいるんですけども、そうではないんですよね。絵本にはちゃんとテーマがあって、もうこれ以上短くできないという言葉で書かれているので、非常に言葉に重みがあるんです。それだけに、うんと感動するんです。

この野球部で私が一番最初に読んだのが、『ゆずちゃん』だったのです。阪神淡路大震災のことを書いた肥田美代子さんの作品です。野球部の子たちですから、入っていくと、「気を付け、礼。お願いしまーす。」って感じ。「ああ、終わった途端に、これやられたら感動なんてどっかに吹っ飛んで行っちゃう。困るなあ。」と思ったんですけども。私が読みはじめました。「なんだよ、俺たち高校生に絵本かよ。」と不服そうな顔をしていましたが、いつの間にやらお話の世界に入ってしまって、「ゆずちゃーん、風船見えるかあ」で終わるんですけど、終わったときにみんなポワーンとしてて誰も気がつかない。私は、終わった後をうんと大切にしますので、黙って立ってました。しばらくして私が帰ろうと思ったら、気がついた子がぴょこっと立ってお辞儀をして。そのくらいお話の世界の中にどっぷりと入ってしまったんですよね。そこからスタートして、ずうっと読んできました。

絵本で聴く力がついてきたなあと思ったらば、だんだん芥川や鴎外や、そういった作家の短編に入っていたんです。その野球部が一年目はあまりたいしたことありませんでした。二年目になったらどんどん強くなっていって、とうとう決勝戦に出てしまった。静岡県、このごろ野球弱いんです。昔は、強かったんですけど。それでも、勝てなかった。あるとき、四回戦かな浜松商業（通称浜商）と戦うことになったんです。ここは強いんです。甲子園で優勝もしている。百年も続いている伝統校なんです。立派な先輩もいっぱいいます。そこと当たっちゃったんです。「あ、今日負けるな。」と思いました。でも、わたしは朝送りに行って、監督が出てくるのが遅かったからね、ついつい演説やっちゃったんです。「あなたたちね、浜商って名前に負けちゃだめよ。浜商なんて名前だけなんだから。あなたたちの方がよっぽど強いのよ。仲間を信じて、自分たちの野球をやってらっしゃいよ。」なんてね。あ、しまったと思ったんですけど、言ってしまったことはもう遅いですよね。彼らぽかーんとして聞いてましたけれど。「じゃあ、行ってらっしゃい。」「うん、行ってくるわ。」なんて感じで行ったんです。そして、試合が始まりました。先攻めで、キャプテンの高木君が一番バッターです。この子がものすご

いおっちょこちょいなんです。みんなが、「お前はおっちょこちょいだから、初球は振るなよ。よく見ていけよ。」って言ったら、「わかった。わかった。まかしとけ。」という感じでバッターボックスに入ったんです。そして構えたら、相手のピッチャーが彼の一番好きなコースへ投げてくれたんです。思わず知らずバットが出ちゃったんです。そしたら、それがホームランになっちゃったんです。で、もう、彼はうれしくてうれしくてね、三塁ベースを回ってくるときに、まだ「ウー」っていう（試合開始の）サイレンが鳴り終わらなかったっていうんです。それぐらいうれしかったんです。そして、とうとうその一点を守って、一対０で勝っちゃったんですよ。これね、嘘のような本当の話なんです。私の作り話ではありません。彼らだんだんだん自信ついてって、その後の大変な試合でも、集中力も切れないでがんばってとうとう決勝戦まで行っちゃったんです。校長先生はＪＴＢを呼んで、「おい、おい。甲子園に行くバスを何台。」とかって、予約しているんですよね。わたしは、ええっなんて思っていましたけれど。決勝戦で負けちゃったんですよ。で、彼らが全て終わったときに聞いたらば、「先生、俺たちすっごく集中力がついた。」ってことを言ってくれました。それからうれしいことにこういう事を言ったんです。「監督の言うフォーメーションがイメージを浮かべながら聞けるようになった。」イメージが浮かんでくるってことは、聴く力がついてきたっていうことですね。集中力がついたってことだって、「聴く力」がついたってことだと思います。「それから判断力もついてきたんだよ、先生。」なんて、結構いいことずくめを言ってくれました。この後、まだ甲子園行っていません。二十一世紀枠ができた時に選ばれたんです。静岡県の代表で。ええって思っていたら、東海地区の代表になって。うーんと思っていたら、いろんな取材が私のところに来ました。「私に取材したってだめだから。子どもたちのところに行って。」って言ったんですけど、とうとう最後に東海地区の代表になって、全国が九つのブロックに分かれているんだそうです。九校出たんですね。そこから二校。だから九分の二にならなければだめなんだけど。だから私は、新聞をひっくり返して、「ああここに強敵がいる。ああ、ここは作文教育やっているんだってさ。だめかもしれないなあ。こっちはね、お掃除をやっているんだってさ。」そんなのが出てるんです。なにか教育的なことをやっているってところを二校選ぶってことだったんですね。最後に、百年以上続いて、まだ甲子園に行ってない学校って決めたそうです。それで、たかだか二十何年の学校はおっこっちゃいました。だからまだ甲子園に行っていません。皆さん、行ったら応援してください。

　わたしが文部省の冊子に野球部のことをちょっと書いたんです。それポプラ社の社長が聞いて「先生、そのことを本に書いて。」って言うんで、「うん、本を読んで甲子園に行こうって書くね。」って冗談で言っていたら、催促が来て、本当だって言うから、私それから一生懸命書いて野球部の子たちに持っていって、「これでいい。」って尋ねたら、「先生、これじゃだめだよ。」「何がダメなの。」って言ったらね、「僕たちは、こういう気持ちで戦っていたんだから、これを書いてよ。」って言うから、書き直して持って行ったんです。またね、子どもたちが、「先生、これ売れるのか。」って言うんですよ。「もしかしたら買ってくれる人もいるかもしれないよ。」って言ったら、「先生、人に金を出して買ってもらうんだったら、嘘を書いちゃいけないよ。」「なんで。」って言ったら、「だって先生。いくら先生が野球を知らないって言ったって、野球はツーアウトじゃチェンジにならないんだぞ。」って言うから、「そんなことぐらい私だって知ってるよ。」「よく読んでみろよ。まだ二人しかアウトになってないぞ。」って言うの。「あ、

ほんとだ。」って言うと、「この間に、まだ誰それが出たんだよ。これじゃだめだな。スコアブックを貸してやるから、それ見て書けば。」って、貸してくれました。だけど私スコアブックの見方もわからないんです。だから一生懸命書いては持って行って、「いい？」っていうと、読んでくれて、「うん、よしよしこれならいい。」とかって言って許可を受けて、できたのがこの本なんです。

高校生でも、こういうふうに変わっていくんですね。それはやっぱり大きな力になっていくと思うんです。もちろん、監督が立派なんです。監督の影響が大きいから、子どもたち変わっていったと思うんですけども、そのうちの何分の一かは私の読みきかせも入っているかな、なんて思うんですけども。おかげでいろんな野球部が本を読むようになってくれました。そのうち文部省で私を表彰してくれないかなあと思うんですけども、誰も何も言ってくれません。

ある学校で、「先生、講演に来て」っていうものですから、「なんでですか。」って言ったら、「うちの野球部ね、本読み始めて甲子園にいちゃったんですよ。」って言うから、「何、先を越したの。なぜ先を越した学校へ私が行って講演するの。」って言ったらね。「そんな難いこと言わないで、来てください。うちの学校もこれが初めで最後だと思うから。」って言うから行ってきました。三重県のある学校ですけどもね。

まあそういうふうに、高校生でも、どんどん変わっていくわけなんですね。で、あのやっぱり、子どもたちの心を育てていく。私はこう思っています。感動、感動が心を育てる。感動がなければ、心は変わらない。感動することで、心がどんどんどんどん育っていくんだろうと思うんです。だから、子どもとともに感動することって、とっても大事なことだろうと思うんですね。それを皆さんやってくださっているんですから、どうぞみなさんも、自信を持ってほしいなあと思うんです。

今、幼稚園のことと高校生の話をしましたけれども、私の経験っていうのは、中学生がいちばん長いわけで、ですから中学生のことを少し話させてもらいます。

私はいつもいつも国語の授業の時に短編を持っていっては、子どもたちがあくびをすると、「あーやーめた。」って言って、本を読み始めたんですが、さっき言ったように子どもたちの聴く力がどうも変だなと思い始めてから、絵本を読むようになったんです。絵本のすばらしいのは、さっき「テーマがあるよ。短い言葉で含蓄のある言葉で書かれているよ。」っていうようなことを言いましたけれども、十分とか十五分で読み終えてしまうんです。これがなによりも、絵本の魅力だと思います。で、絵本ですから絵を見せながら、子どもたちに読んで聞いてもらうのが大事なことなんです。しかし、中学生に、教室でそうやって読んでいると、後ろの方の子が、「絵が見えない。」って文句を言うんです。それで机を後ろに運んで前へいらっしゃいなんてやってると時間がないから、そのまま読んじゃうわけ。そうすると後の連中が絵が見えないなんて文句言うから、親切に、周りをずっとこうやって歩いていって、絵を見せてあげたんです。しかし、こんなことをやっていると十五分じゃ読み終わらないなって思って、今度は、ずるいことを考えたんです。「あなたたちね。十二年も三年も人間やってるでしょ。自分の経験の中から自分だけのイメージを作りなさい。絵を見せないよ。」って言って、絵本を読んだんです。基本的には絵を見せるってことは、大事なんです。だけどね、そうやって読み始めたんです。読み終わってから絵本を教室に置いてくる。そういうふうにしたんです。その中で子どもたちは自分だけのイメージを作っていくんですね。それは、他の人ともしかするといっしょの部分があるかもしれないけれども、自分の生活をもとにして、自分だけ

のイメージを作っていく、これも大事なことだなと私は思いました。

そして、いろんな絵本を読んできたんですけれども。あんまり教訓的な絵本っていうのは、感心しませんよね。だけれども、感動的なものをうんと読んでいくというのは大事なことだって思うんです。何を読むかっていうことで、みなさんね、こういうのがあるんです。（『よい絵本』を見せながら）これ二十一回目まではねぇ、千九百円もして高かったんですけども、『よい絵本』というのをＳＬＡから出しているんですね。二十三回が出ています。これは二十二回ですけども、ここから千六百円になって安くなってきたんですけど、これの良いところは、例えば、「へびのクリクター」。ここに表紙があります。そしたらね。著者がだれで、訳したのが誰で、本の大きさがどんだけで、出版社がどこで、定価がいくらで、ってのをここに書いてあるんです。ここの右のところにあらすじが書いてあるんです。いちばんいいのはその下に、それを読みきかせしたら子どもたちがどうだったか、それまで書いてあるんです。で、これなかなかいいなあと思って、「絵本を選ぶときには、これ、参考になさるといいですよ。」とみなさんにオススメしてるんですけどもね。二十三回が出ていますが、二十二回とどれほど違うかというとあんまり変わらないんです。それは何なのかというと、この中にある本で、出版社がなくなったりなんかしたら、もう買えませんよね。だからそれをとって、そして新しい良い絵本として選ばれたものを数冊、その中に入れてあるわけなんです。それが二十三回です。二十四回が出てもそうなると思います。二年に一度ずつ出ています。だから、二十二回だったら二十二回を一冊持っていれば、まぁ三十年や四十年使えます。だから、そういう意味で、いいなあと思うんです。例えばここに『三びきの子ぶた』があります。『三びきの子ぶた』なんて一回から載っています。それから、『しょうぼうじどうしゃじぶた』とかね。こういう日本の話『おしいれのぼうけん』なんて子どもたち大好きですよね。その次に日本の昔話が載っています。その次が外国の絵本。それから最後に、知識の本と書いてあるのは良くないなあと思うんですけど、科学読み物が載っています。ですからどうぞみなさん。こういったものを参考にされて、絵本を選ばれると、いんじゃないかなと、思います。私の大好きな『きかんしゃやえもん』とか、子どもたちの大好きな『ぐりとぐら』『キャベツくん』とか、こんなのずっと前から載っているんです。こういったのを参考にして、私は新聞の広告や本屋へ行くと児童書のところに行って、いろんなものを立ち読みしてるんです。それから、図書館へ行って、児童書のコーナーへ行って、いろんな本を見て、学んできて、「お、今度、子どもたちにこれいいな。このクラスにはこんなことが問題になっている。じゃあこれいいな。」っていうふうにして読んでいます。私の授業に行くクラスは読んであげられます。自分の担任しているクラスは、もちろん読む回数が増えてくるんですけども。ぜひね、学校全体でやりたいなと思っていたんです。先生たちに研修会のときや何かに一生懸命読みきかせするんですよ。そしてみんな聞いていて、「おお、いいなあ。」ってすごく感動して聞いてくれるんです。「じゃ、クラスで子どもたちに読んでやって。」って言うと、「俺はそんなことはできない。」って、やってくれないんですよね。だからいつか学校全体でやりたいなっていうのが私の夢でした。そしたら間違って校長になったものだから、じゃあ、校長になったその学校でやろうと、まず小学校ではじめました。小学校でずうっとやるつもりでいたら突如転勤になって、中学校へ行ってしまったんです。じゃあ、中学校でやろうと思って、私の最後の勤務校ですけれど、静岡市立南中学校ですけれども、生徒数七百五十人。二十一学

級ありました。そこで読みきかせを始めたかったんです。でも、そこの学校はもう学校創立三年目ぐらいから朝読書が、ずうっとあって、学校中がシーンと静まり返って朝読書をやっているんです。「朝読書か。いいなあ。」と思ったんです。でも行ってみたら、子どもたちの中に、ずうっと本をこうやってぺらぺらめくって終わっている子がいる。「ああ、かわいそうに、あの子は。」って思って。私は二十一学級全部読みきかせに回りました。で、先生たちには、「ここで、必ず、子どもたちを見ていること、内職をしないこと」と、先生たちの方で見ていてもらいました。子どもたちの表情がどんどんどんどん変わっていくのを見て、先生たちはやっぱり読みきかせていいなあと思ったんです。それがわかったころ「じゃ、みんな始めようよ。」っていって始めたんです。

でもそれだけでは足りなくて、保護者にも協力してもらいたいと思って、「本を通じて、子どもたちと保護者、子どもたちと先生、感動して欲しいな。」って思って始めたんです。私はちょっとずるいことを考えました。「豊かな心の子を育てるには、校長が話をするから、みんな来てください。」と言って来てもらいました。で、お話ししました。そしてね、「最後に私が読みきかせするわ。」といって、教科書にあった向田邦子の「字のないはがき」を読んだんです。みんなすっごく感動して涙を流して聴いてくれていました。すかさず「今日来た人はみんな子どもの前で読むこと。」って言ったんです。「校長は私らをだましました。」「ちがうよ。だましちゃいないよ。大きな字で豊かな心の子を育てるにはって書いてあるけど、その下にはちいちゃい字で読みきかせ始めようって書いてあるじゃない。」「でもだましたことには違いない。」って言うからね、「あ、そう。じゃあ、だましたと思う人はやってくれなくてもいいよ。」って言ったらば「いやそんなこと言わずにやろうよ。」っていう人が出てきて、保護者の読みきかせが始まりました。当時、中学校で保護者が読みきかせに来ている学校なんてなかっただろうと思うんです。テレビ東京がわざわざ取材に来てくれたぐらいですからね。私は、純粋に、子どもたちと保護者、子どもたちと先生、一冊の本を通じて感動してくれたらいいなという思いで始めました。一番最初に読んでもらったのが、『さっちゃんのまほうのて』です。幼稚園児の本です。それを七冊買って、お母さんたちに練習してもらって、教室へ行ってもらいました。一年生七クラス、次は他の人達に、やっぱり七冊を有効に生かして、三年生に行ってもらいました。それから二年生へと。学年ごとに日を変えて。七冊買った本が三回使えるんですよ。その後、それを図書館に入れておくというふうにしました。お母さんたちで行ってくれました。そしてね。みんな何回も何回も一生懸命練習して来てくれたんですね。子どもたちも一生懸命聞きました。帰ってきたお母さんたち、みんな上気して赤い顔して「感動したわあ。中学生があんなに一所懸命聞いてくれるとは思わなかった。」って言って帰っていきました。「またやりたいな。」で、保護者の読みきかせがずうっと続いています。

先生たちも読んでくれました。そんな中である男の先生が、私のところへやって来たんです。その男の先生は、体育の先生で、色は真っ黒くて、声はでかい。なかなかいい学級経営をやるんですが、クラスの子以外の子たちは、学校で一番恐い先生だと思っているじゃないかと思うんですが。その先生が私のところへやってきて、「先生。なにかいい本ないですかね。」って言うから、「読みきかせの本だったら、あそこにあんなに沢山あるじゃないの。」「だめです。僕は自分のクラスは特別なものをやるんです。」って言うからね。たまたま私の机の上に、丘修三さんの書いた『ぼくのお姉さん』という本がありました。丘さんは養護学校の先生をなさっていた。